

Title	観測の案内(11月)
Author(s)	葵星
Citation	天界 = The heavens (1936), 17(187): 37-38
Issue Date	1936-10-25
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2433/167349">http://hdl.handle.net/2433/167349</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

観 測 の 案 内

 (11月)

この月は、忠實な星の愛好者の観測月で、清澄な蒼空の下に、眞の星の光の神秘を見、深淵な宇宙の眞理の大海に浸ることが出来る。

## ★ 流 星 群

アマチュア観測の最も興味の深い、流星群観測は、蓋しこの月が最も盛んに行はれ、有名な獅子座の流星群を始めとして、其他毎年期待せらるゝ、出現状態の興味のあるものが多い。

1) しし座流星群：數年來珍しい出現を見せてゐるから、本年も特に注意して觀察する要がある。

最盛：13日—18日，輻射點：獅子座  $\gamma$  星附近（赤經  $150^\circ$ ，赤緯  $+22^\circ$ ）。

性質：速度急に於て痕顯著なり。

2) ひつじ座流星群：毎年11月上旬に現れる。速度緩かな、光輝のある流星で、獅子座群と混合して出現する。

上旬，輻射點：羊座41番星（赤經  $43^\circ$  赤緯  $+22^\circ$ ）。

3) アンドロメダ座流星群

17日—23日最盛，輻射點：アンドロメダ座  $\gamma$  星（赤經  $25^\circ$ ，赤緯  $+43^\circ$ ）。

性質：速度甚だ緩るやか。

## ★ 變 光 星

小望遠鏡や、双眼鏡を所持さるゝ方々の、星への最も親しみを増す有意義な観測は、先づ變光星の光度變化を觀測さるゝことであらう。有名な變光星の最初の教示者「鯨座 $\alpha$ 1星」は、丁度宵の東南の見易い天空に現れて、その名ミラの如く、不可思議の光度の増減を繰返してゐる。恰も10月末このミラは極大期を経た筈で、この月は其後の経過を見守るべきである。

極小期の豫報（11月）

ア ル ゴ ル		う し 座 ラ ム ダ	
5日	14時	3日	19時
8	10.5	7	18
11	7.5	11	17
14	4.5	15	16
17	1	19	15
19	22	23	14
22	19	27	13
25	15.5		
28	12.5		

1) くじら $\alpha$ 1星（ミラ） 變光範圍：2.0等—9.6等，週期：331日，分光型：Mdp.

- 2) ペルセ座ベ星(アルゴル) 有名な食変光星で、アルゴル型の名を持つ。

光度: 2.3等—3.5等, 変光時間: 9.3時, 週期: 2.867日, 分光型: B8.

- 3) うし座ラ星 これもアルゴル型の代表的なものである。

光度: 3.8等—4.2等, 変光時間: 10.5時, 週期: 3.953日, 分光型: B3.

★ 黄道光: この月は、暁近くの東天に、黄道に沿った白光—黄道光がよく見られる。黄道附近の簡易な星図を持つて、その形態・消長をスケッチして記録される事を薦める。 (葵 星)

## 倉敷天文臺第5回講習會報告

水 野 千 里

山本一清博士を迎へて第5回講習會を開催した。

第1日 昭和11年8月24日

水野主事開會を宣し、原名譽臺長一場の挨拶をなし、山本博士は「基礎天文學」の題下に

1. 天文學とは何か＝新天文學と舊天文學—天文研究の精神—天文研究の方法—天文學と文化。

2. 天球の天文學＝天—天球—術語の定義—球面三角術—曆法—日食と月食に就いて述べられ、午後撮影それに引續いて、水野主事は「星座」に就いて講演、15時から茶話會、夜分天體幻燈及び天體觀望、山本博士は幻燈の説明、小山理學士は望遠鏡使用、天體を觀望せしめ、水野主事は實地星座に就いて説明した。

第2日 8月25日

9時から正午迄山本博士は續講。

3. 天體の運動理論＝ニュートン以前—ニュートン力學—軌道の要素—太陽系の過去から未來へ。

4. 恒星天文學＝位置—運動—光輝—スペクトル—視差。

5. 宇宙觀＝銀河—星霧—宇宙の發展。

6. 天體觀測の器械＝眼—望遠鏡—寫眞—天文臺に就いて講ぜられ、直ちに歸洛された。

第3日 8月26日

9時から正午迄、小山理學士は「變星」に就いて、水野主事は「天球」に就いて説明し、講習證書授與式に移り、水野主事の報告後、14名に講習證書を授與し、3日間の講習會は終了した。